翻訳

ヴィルヘルム・ショーフ
『ベルリンにおけるグリム兄弟』―(試訳)(3)

Wilhelm Schoof, Die Brüder Grimm in Berlin, Berlin, 1964.

稲　福　日出夫

はじめに
ベルリンにおけるグリム兄弟
ヤーコプとヴィルヘルム グリム、就任講義を行う
三月前期のベルリンにおける社交的な生活　（以上、第11号）
「真夏の夜の夢」の上演のためポツダムへ向かう臨時列車のなかで
ヴィルヘルム グリムの誕生日への学生の集い
妨害された誕生祝賀パーティー（以上、第12号）
グリム兄弟、ゲルマニステン大会に参加する（以下、本号）
グリム兄弟はベルリンでの革命をどう経験したか
フランクフルトのパウルス教会でのグリム兄弟
ヤーコプ・グリムとシュレスヴィッヒ・ホルシュタイン問題
ベルリンでの教授としてのグリム兄弟

グリム兄弟、ゲルマニステン大会に参加する

19世紀の40年代に入ると、日を追ってドイツ全土に蔓延していった国民運動（nationale Bewegung）は、1846年にフランクフルト、1847年にはリューベックでそれぞれ開催された２度のゲルマニステン大会（Germanistenversammlung）で、その内実が明らかになった。なるほど、これらの大会は、政治的目標を掲げ、それを追求するという性質のものではなかった。しかし、ゲルマニスティークの学（die Wissenschaft

der Germanistik）が、まさにドイツの統一と再生に関心を抱かせることになったことは確かであった。それ故、フランクフルトで開催されたゲルマニステン大会において、議長を選出する審議がおこなわれた際、ルートヴィヒ・ウーラント（Ludwig Uhland. 1787-1862. ドイツの詩人、文学史家。大学では法律学と文献学を学び、弁護士となる。後期ロマン派の中心人物で、自由主義の立場からドイツ統一のために戦った。－訳注）が、レーマー大広間（Römersaal）に座している200名ものゲルマン学者たちの嵐のような拍手でもってヤーコプ・グリム（Jacob Grimm. 1785-1863）を推薦したことは決して偶然ではなかった。それは、来るべきドイツの未来への信念を胸にはぐくみ、それを強固なものにするというドイツ人の本性への深い知識や見識の点で、ヤーコプ・グリムと並びうる人物はいない、と思われたからであった。

ゲルマニステン大会の議事録は次のように伝えている。「1846年９月24日、レーマーの大広間に掲げられている歴代の皇帝の肖像画が、200名もの傑出したドイツ人の面々にその視線を注いでいた。そして、ルートヴィヒ・ウーラントが声を発するのを待っていたあいだ、息の詰まるような静寂が大広間を覆っていた。ウーラントは、こう切り出した。『最初の議長選出を遅滞なく行うことが必要です。そこで私に或る希望が伝えられております。それに対し私は喜んで賛成しております。その希望とは、投票することに代えて、或る人物を議長に任命してはどうか、ということであります。この人物の手には、すでに長年にわたってドイツ歴史学のすべての筋糸が集まって交叉しており、その人の手からまた、初めて幾つもの縒り糸が伸びて出ていったのです。すなわち、ポエジーという黄金の糸のことであります。この人は、ともすると無味乾燥なものと考えられがちな学問、つまりドイツ法学において、その黄金の糸をみずから紡ぎだしたのです。さて、私に伝えられた希望というのは、この人物を、みなさんの賛同によってこの大会の議長に選出してはどうかというものであります。もはや名前を挙げるまでもないことと思いますが、その人物とは、ヤーコプ・グリムのことであります』」。

ウーラントがこう述べた後、嵐のような拍手が沸き起こった。それから、ヤーコプ・グリムは、心からの謝辞を述べ、会議の議長に就くことを引き受けた。その後、ヤーコプ議長のもと、討議が開始され、また、この大会に代表の出ている三つの学問、すなわち法学、歴史学および言語学の相互関係とその繋がりにかんする彼の考え抜

かれた意味深い講演がおこなわれた。この大会では、ヴィルヘルム・グリム（Wilhelm Grimm. 1786-1859）も、グリム兄弟で編集していた『ドイツ語辞典』の進捗状況に関し、その概要と今後の見通しについて報告をおこなっている。大会二日目にヤーコプ・グリムは、彼の２回目の講演をおこなった。それは、厳密な学問と厳密でない学問の違いについて論じたものであった。そのなかで彼は、祖国にかんする学問研究が、いかに高い価値を有するものであるかということを強調した。また、その講演は、外国からの参加者のために、ドイツ語のほかにフランス語も用いておこなわれたのであった。

大会最終日の９月26日、ヤーコプ・グリムは、閉会の挨拶の中で、今回の大会を受け入れてくれたフランクフルト市に感謝の念を述べた。そして、三日間におよんだ第一回ゲルマニステン大会は終了した。翌1847年にリューベックで開催された第二回ゲルマニステン大会においても、ヤーコプ・グリムは、ふたたび議長に選出された。トラヴェミュンデ（Travemünde）で祝宴が開かれたが、その様子からも窺えるように、リューベックに参集した人々は、前回大会での彼を忘れてはいなかった。

その懇親会では、ハンザ都市リューベックの誇りに満ちたこれまでの歴史を回顧することでテーブルスピーチは終わった。さらに、上級控訴裁判所長官パウリ（Pauli）が立ち上がり、乾杯の辞を述べた。そのなかで、パウリは、ヤーコプ・グリムを、言語学、歴史学および法学という三つの学問領域（Reich）の深奥を究めた人物である、と褒めたたえた。彼はこう述べる。「ドイツの言語学、ドイツの歴史学またドイツ法学の進展のために格闘している人々にあって、そのなかのどの分野においても多大な成果をあげ、我々がその学恩を感じている人物、ドイツの言語学においてはドイツ文法を初めて学問的に基礎づけ、ドイツ歴史学の領域では深遠な神話的背景にまで踏み込み、ドイツ法学の分野では法の中に詩（Poesie）を導入し、ドイツ法学をその奥深い根底まで明らかにした人物、そして、第一回の、また今回の第二回ゲルマニステン大会の議長であるヤーコプ・グリム。彼のために乾杯をささげたいと思います」。

それに対し、ヤーコプ・グリムは心を込めた謝辞を述べた。「時が経過すると、人々の記憶から私のことなどすっかり消え去ってしまうことでしょう。しかし、それでも、もし私のことを思い出すことがあったとするならば、敢えてここで申し上げた

いことは、願わくば、私に関して次のように語ってもらえたら、ということであります。ヤーコプ・グリムは、彼の人生の中で、彼の祖国以上に愛するものはありませんでした、と」。こう挨拶を述べた後、彼は、感動を抑えきれず旧友のダールマン（Freidrich Christoph Dahlmann. 1785−1860. ドイツの歴史家、政治家。1833年にヤーコプ・グリムとともにハノーヴァーの憲法廃止に反対して追放されたゲッティンゲン七教授の一人。－訳注）と抱き合った。この会議の、もっとも厳粛で荘重に満ちた瞬間であった。

グリム兄弟はベルリンでの革命をどう経験したか

1848年、ベルリンで革命が起こった。街頭では激しい戦闘が繰り広げられていた。その日、大学で講義をしていたヴィルヘルム・グリムは、昼過ぎに学生たちに導かれて、大学のあるウンター・デン・リンデンから歩いて半時間ほどの距離にある住居へ帰っていった。途中、パチパチと銃撃戦が起こり、大砲の音が響くまっただなかを通り抜けながら、リンク通りにある住居へと急いだ。この三月革命について、ヴィルヘルム・グリムは、３月20日、カッセルに住む弟のルートヴィッヒ（Ludwig Emil Grimm. 1790−1863. グリム兄弟の弟。画家。愛称ルーイ。『グリム童話』第２版第１巻の「兄と妹」の挿絵、第２巻の「フィーマンおばさん」の肖像画を描いている。グリム兄弟とは精神的にもっとも近しい弟であった。－訳注）に次のように手紙で報告している。

「私は、これまで生きてきたなかで二日前の３月18日ほど、不安と動揺、興奮のうちに一日を過ごしたことはありませんでした。２時頃には、民衆の納得のいく承諾が得られたことで歓喜の声があがっていたのであるが、３時頃になるともう悲惨で痛ましい戦闘が始まっていました。（その日の午後２時には、王宮前広場に集まっていた民衆に対して、国王フリードリッヒ・ヴィルヘルム４世の勅令Patentが読み上げられた。それは、国王がドイツ統一と憲法の実施にかんしては先頭に立ち、検閲制を廃止して出版の自由を認めるという内容であった。その国王勅令が発表されると、民衆は歓喜した。国王は二度も王宮のバルコニーに現われて民衆の歓喜の声に応えた。しかし、近衛師団の一部から２発の銃声が起こった。それが、３時過ぎ

にはベルリン市内各所で軍隊と市民とのあいだで激しい市街戦が繰り広げられた誘因である。ちなみに、民衆の前でその国王勅令を読みあげたのは、「プロイセン立法改訂相」のサヴィニーであった、という。また、立法改訂大臣は、プロイセン王国における事実上の総理大臣であった、ともいわれている。ベルリン大学を辞し、立法改訂相に就いたサヴィニーが、そのポストを降りることで、ベルリンにおける革命運動の終息がはかられた。－訳注。なお、林健太郎『ドイツ革命史―1848･49年―』山川出版社、1990年、40頁以下。河上倫逸『法の社会文化史―ヨーロッパ学識法の形成からドイツ歴史法学の成立まで―』ミネルヴァ書房、1989年、196頁以下、堅田剛『ヤーコプ・グリムとその時代―「三月前期」の法思想―』御茶の水書房、2009年、67頁以下、参照)。14時間以上にわたって、二千名ないし二千五百名の男たちが街頭で民衆と激しく戦闘を繰り広げていました。ドンパチと鳴り響く銃声、大砲や散弾砲撃の音には恐怖を覚えました。とくに夜になり暗闇の中でその音を聞くとなおさら恐怖感に襲われました。方々から火の手があがっておりました。大砲の音がしばらくのあいだ止んだかと思うと、続いて、不気味な警鐘が打ち鳴らされておりました。私たちが住んでいる通りは、船が通る水路に面しており、その水路が通りの一方の端を横たわって流れているので、戦闘がこの通りにまで及ぶことはなく、その点では、戦闘に巻き込まれることはありませんでした。しかし、それでも私たちの住居からそう遠くはない場所にたっているアンハルト門でも戦闘が起こっており、近いだけにたいへん激しい戦いのように感じました。もちろん私たちは一睡もすることなく、一晩中起きておりました」。

その年の12月６日にも、ヴィルヘルム・グリムは、ルートヴィッヒに手紙を書き送っている。

「戒厳令がしかれて以来、私たちは落ち着きを取り戻し、平穏のうちに過ごしております。人々は快活な日常生活に戻り、楽しい日々を送っております。私は、ポツダムの大きな駅構内に第一近衛連隊が到着し、隊列を組んでブランデンブルグ門へ向かって移動する光景を初めて見ました。以前のように、はつらつとした空気を放って行進しているかのようでした。整然としていて、誰ひとりとして他人にからんだり、不快感を与える兵士はいませんでした。兵士たちは模範的な態度をとっておりました。私たちは、近所で宿泊した６名の兵士のために週に数回、昼食を作っ

てあげました。その時には私たちの銀製のスプーンを使っていただきました。数時間後には、食器類や差し出した物品すべてを、きちんと返してくれ、心のこもった感謝の言葉を述べていました。さて、今や、新しい憲法が発布されました。国王が承諾したものを妨害するものは、今や何もありません。あらゆることが、国王から発せられるのです。国王をよく知らない者だけが、国王の高貴で慈愛に満ちた心情に疑いをもっているのです。そのうち、国王は保守反動だというつまらないわめきやうわさは聞かれなくなるでありましょう。しかしまた、惨めな煽動家たちは何か別の粗探しを試みるかもしれません」。

新たな希望に満ちた革命の年である1848年は、平穏な書斎から諸々の選挙会議（Wahlversammlung）へとグリム兄弟を駆り立てた年でもあった。1849年３月４日、ヴィルヘルム・グリムは、そうした会議のうちの或る集まりについて、義理の姉妹であるアマリエ・ハッセンプフルーク（Amalie Hassenpflug. グリム兄弟の妹シャルロッテとハッセンプフルーク家の姉妹とは友達であり、兄弟にドイツのメルヘンを提供したことでも知られている。そして、シャルロッテは、1822年、そのハッセンプフルーク家の息子ルートヴィッヒと結婚した。－訳注）に宛てて書簡を送っている。

「私は課せられた義務を果たすために選挙会議から逃れることができません。その会議は、煙草の煙や騒がしい議論のなか、延々と８時間にも及び、私にとって苦痛に満ちた時間であります。が、ときには純朴な市民が、真っ当なことを鋭く直截に話し出すのを聞くと、うれしく思うこともあります」。

ヤーコプ・グリムもまた、テオドール・フォンタネ（Theodor Fontane. 1819-1898. ドイツの小説家、詩人。薬剤師となるが、のちにジャーナリストに転じ、対デンマーク戦争や普墺戦争、普仏戦争に記者として従軍。晩年には小説に専念する。－訳注）が伝えているように、そうした選挙会議のなかのひとつ、王立劇場のコンサートホールで開かれていた或る会議に参加しており、そこで、積極的に討議に加わっていた。

「それから年老いたヤーコプ・グリムは、ゆっくりとした足取りで演壇に歩み寄った。きわめて印象的で独特な風貌が－それはモムゼン（Theodor Mommsen. 1817-1903. ドイツの歴史家。チューリヒ大学ローマ法教授、ベルリン大学古代史教授。主著『ローマ史』は名著の誉れが高い。－訳注）の風貌がそうであったように、ひ

とびとの記憶に深く刻み込まれたのであるが ― その長い、雪のような白髪によってまわりを圧倒し、ドイツという国にかんすること、しかもかなり普遍的なことがらについて話し始めた。ヤーコプにすれば、まさしく政治的な集会のあちこちで、この問題の核心に触れる要請文を記録に残してほしかったであろう。しかし、そうした要請文が採択されることはなかった。というのも、誰もがヤーコプの発言する姿に驚き、感動するのであるが、彼の見解に従わねばならないのかどうか、はたまた、彼についていこうかどうしようか、人々は、その立ち位置、距離感をはかりかねていたのであった」。

ヤーコプ・グリムは、書簡や彼の著作の序文などで、彼が状況に対して心の奥底から感じてしまう政治的な懸念をしばしば書き記している。が、はたして、彼は、決して本来の意味での政治家ではなかった。それゆえに、1848年のパウルス教会（Paulskirche）における議員としての活動も失敗に終わらざるをえなかった。つまり、己が世間離れした学者であることを、政治家としての資質が自分にはいろんな点で欠けていることを、はっきり悟ったのであった。たとえば、聴衆を納得させ、彼らの心をつかむすべを心得ている弁舌の才能、また、相手方の論難に対する沈着冷静で当意即妙な応対、公衆の前に出ていくことに喜びをおぼえること、要するに政治的功名心や名誉欲が自分には欠けていることを自覚したのであった。

ヤーコプは、４か月間、議員として活動したのち、ふたたび静かな書斎に引きこもることを良しとした。彼にとっては、パウルス教会における審議の進み具合があまりに遅いことからして、すでに気に入らなかった。ヤーコプの胸の内には、静かな自宅へ戻りたいという思慕が、日増しに大きくなっていった。そしてついに、９月になると辞職願いを提出する決心を固めた。パウルス教会で左派に属する議員たちに対し、ヤーコプは、不快の念をいだいていた。彼自身そこに所属しており、彼の静寂な書斎のなかではペンによって左派の信念を支持し、弁護していたのではあったが。ついに、彼のなかに窮屈で意気消沈させるような議会の空気から逃れる決心がついた。ヤーコプにとって、議会でのあらゆる事柄が煩わしく、苦痛を与えるものであった。彼はいかなる反論にも耳を貸さなかった。彼は、諸々の政治的失敗への絶望感におそわれた。たとえばマルメー（Malmö）で結ばれた休戦条約（プロイセン王がドイツ連邦の名において８月26日にスウェーデン南部の港湾都市マル

メーで、デンマーク王と締結した休戦条約。７か月間の休戦が約された。－訳注）に関し、1848年９月５日に開かれた議会での採決の、その後の経過に失望した（マルメー条約を停止する、つまり戦争を継続するという決議案が、９月５日の本会議で、238対221で一旦可決されたが、９月15日、激論の後、休戦の実施を妨げないという現実的提案が、257対236で可決された。－訳注。高橋健二『グリム兄弟・童話と生涯』小学館、1984年、268頁以下、参照）。1848年の革命年に彼は大いに期待を寄せていたのであったが、しかし、彼にとって、その年は失望の年でもあった。それゆえ、それまで党派を超えた立ち位置にいたヤーコプであったが、以後、どんどんと左寄りに駆り立てられていく。彼は、溜まりに溜まった怒りや不満をゲオルグ・ヴァイツ（Georg Waitz. 1813-1886. ドイツの歴史家。ゲッティンゲン学派を創始し、ドイツ中世史を批判的に研究した。－訳注）に宛てて、こう書き送った。

「私は年をとるにつれ、ますます民主的（demokratisch）になってきております。私がもう一度、パウルス教会の議場に赴き、そこでの議論に加わるとするならば、以前にもましてウーラントやショーダー（Schoder）の声に耳を傾け、彼らとともに票を投じたことでしょう。というのも、旧態依然とした既存の諸関係の枠に、既得権益を享受する路線に憲法を沿わせ、そこに無理やり押し込むことでは、素晴らしい成果をあげることはできないからであります。私たちは、多くの成果が得られることに執着しているし、また、荒々しい暴力の勃発することを危惧しております。祖国の偉大さが無視され背後に退くようなら、私たちの自尊心なんて小さいものです」。

フランクフルトのパウルス教会でのグリム兄弟

1848年、革命の起こった年は、ヤーコプ・グリムをもまた、めまぐるしい政治の渦中に巻き込んでいった。が、そもそも、ヤーコプは政治的なひとではなかったし、また、政治的たらんと欲したこともなかった。しかし、ヤーコプがハノーヴァー憲法への順守を誓い、その後、起こったゲッティンゲン七教授事件で示された宣誓に対する彼の誠実な態度、その信念によって、ヤーコプの名は、国内外に知れ渡るようになっていた。最初のドイツ議会がフランクフルトのパウルス教会で開催された

とき、多くの選良たちとともにヤーコプ・グリムもそのなかにいた。彼は、ミュールハイム市（Mühlheim an der Ruhr）の代表者として選出されたのであった。彼は、その選挙結果を、懸念することなく受け入れ、他の議員たちより数日遅れて、５月23日に旧帝都フランクフルトに到着した。というのも、５月18日にはすでに教会の鐘の音や押し寄せた群衆のあふれんばかりの熱狂や感激のなかで、パウルス教会への議員たちの厳粛な入場の儀式が行われていたからである。みずからの確固とした信念によってのみ行動すること、或る党派の見解に順応してみずからの意見を曲げないこと、それらを信条としたヤーコプは、いつもウーラントと並んで、議事堂の演壇のすぐ前にある中央の席についた。そして、あらゆる党派の交渉や会議にかかわることはなかった。

ヤーコプ自身によって提出された動議の理由を述べるため、彼は幾度か重要な演説をおこなっている。たとえば、文学における貴族性について、勲章について、シュレスヴィッヒ・ホルシュタインについて、ドイツ基本法第１条について、等である。シュレスヴィッヒ・ホルシュタイン問題では、ヤーコプは、初めから、デーン人（Däne）の主張には反対であった。というのも、彼らは、シュレスヴィッヒ・ホルシュタインをデンマーク王国に併合しようと目論んでいたからである。デーン人がシュレスヴィッヒ・ホルシュタインを統治することもそう長く続くことはないだろうと、ヤーコプは確信していた。

ヤーコプ・グリムは、階級的自負心（Klassendünkel）や階級的精神（Klassengeist）とは無縁で、そうした心性を嫌悪していた。彼は、平民、一般の市民階級を支持していた。彼は、通常の市民が登り詰め、貴族階級に列することに敵対した。彼は、貴族の特権といったものは正当化されえない、と捉えていた。そうしたヤーコプの考えは、友人のアウグスト・フォン・ハクストハウゼン（August von Haxthausen）に宛てた1815年９月４日付の手紙のなかで、率直に述べられている。

「私が思うに、貴族に関していえば、少なくとも北ドイツにおいては、彼らが特権をふりかざす時代は過去のものとなった。もし、ハノーヴァーでそうであるように、あるいはここヘッセンの一部にもまだ残っているような、貴族による尊大な振る舞いが許され、今なお続いているとしても、いずれにせよ、貴族制度は、将来、完全に消滅することになるでしょう。今、ドイツで真っ当で強固なものが生じなけ

ればならないとすれば、それは、現在、その兆候が見られる方向を継続して推し進めていく先にあるだろう。すなわち、市民的精神と貴族的精神の差異をなくし、その如何を問わない精神によって、歴史を推し進めていくことである。その認識を欠く者は破滅する」。

貴族制度にかんし、さらに明確に表現したヤーコプの見解を、彼が友人アルニム（Achim von Arnim. 1781-1831. ドイツロマン派の作家。ブレンターノと協力して、ドイツ民謡集『少年の魔笛』を集成した。1811年、ブレンターノの妹ベティーナBettinaと結婚する。－訳注）に宛てた1820年４月2日付の手紙のなかにみることができる。

「おのれを貴族階級に属する者であると主張し、実際、その身分にふさわしいように振る舞う貴族的な態度は、ときには、日常の社会生活を共に送っている市民階級の人々の感情を傷つけたりもする。・・・例えて申し上げるならば、もし、貴族が白パンを食するなら、私は、市民階級が日常的に食する黒パンを口にするほうが、よほど気分がいいものです。ひとはしばしば、同じ事柄について、別様に認識するものです。先ず、教育を通じて物事の捉え方が刻み込まれます。それと似たようなものとして、民族の固有性・特性と他の民族の了解不能、錯誤があります」。

この信念をヤーコプは持ち続け、議会で彼は次のような提案をした。

「貴族、市民そして農民のあいだに存在するあらゆる法的な区別、差別を止めること。貴族階級への昇格も、また、貴族階級のなかでの低い地位から高い地位への昇格も行わないこと」。

そのように提案する根拠として、ヤーコプは、次のように説明した。つまり、貴族制度は崩壊し、完全な堕落への道に突き進んでいるので、貴族階級は、もはや特権を与えられた身分とみなされることはないでしょう、という。「貴族階級は香りを無くした花である。おそらくその色彩も失ってしまった花である」。

市民階級に対する貴族階級の特権は廃止されねばならない。さもなければ、民族共同体が分裂してしまう恐れがあるからである。そのようなヤーコプの提案は、20票差で否決されてしまった。ヤーコプが思うように、それはきわめて不当な結果に終わった。

ヤーコプの出した勲章についての提案も、同じ票差で否決されてしまった。彼は、

1848年８月２日、弟ヴィルヘルムに宛てた手紙のなかで、そのときの残念に思う気持ちをこう記している。

「勲章にかんしていえば、私がそれを提案してから４週間もだらだらと審議していたのでした。そうしたことが慣例になってしまっているのですが、それがいかに非ドイツ的であり、まずいことか。しかもそれが単にルイ14世の時代のフランス人を真似ているだけだということは、あまりに明らかであります。しかもまた、当のフランス国はただ一個の勲章をもっているにすぎないが、ドイツ国においては、階級の種々の色合いに応じた20数個の勲章が検討されるべきだ、という。そうしたことは、われわれの民族の威厳・品格と相容れない。私はそう思うのです」。

ヤーコプ・グリムとシュレスヴィッヒ・ホルシュタイン問題

シュレスヴィッヒ・ホルシュタイン問題（Schleswig-Holstein）は、以前からヤーコプ・グリムの関心事であった。前世紀の中葉頃から、なかなか解決のつかない大きな問題となっていたこの件で、ヤーコプは、反デンマーク的な考え方をもっていた。彼は、この件に関するこれまでのすべての議論に対して、大いに憤慨していた。その思いは、彼の死後、姪のアウグステ・グリム（Auguste Grimm. 1832-1919. ヴィルヘルムの一人娘。ヤーコプは弟ヴィルヘルムが結婚した後も、弟家族と一緒に暮らし、むしろ、そこの家長的存在であった。－訳注）が、フリッツ・ロイター（Fritz Reuter）に宛てた1864年１月９日付の手紙によって窺い知ることができる。

「私たちの愛する伯父ヤーコプが亡くなった悲しみのなかにあって、それでも私たちを時には慰めてくれる唯一つのことは、ヤーコプが、もはやシュレスヴィッヒ・ホルシュタイン問題のごたごたに関わることがなくなった、ということであります。伯父の激しい気性からいって、この問題の経緯、行く末に、ものすごく憤慨したことでありましょう。伯父は、1850年当時、諸々の集会をすべて自ら主導し、心底、この問題で疲労困憊しておりました」。

この問題にかんし、ヤーコプがどれほど激しくこころを揺り動かしていたか。それは、或るベルリン住民に対して、ヤーコプが1850年８月31日付の「立憲新聞（Constitutionellen Zeitung）」に投稿した声明文で知ることができる。そのなかで彼は、

シュレスヴィッヒ・ホルシュタインに住むドイツ人のための救援金が僅かしか集まらなかったことに対し、失望感を表明したのであった。1848年４月16日付の「フォス新聞（Vossischen Zeitung）」にデンマーク人に味方する匿名の論稿が掲載されたとき、間髪入れず、翌日の「フォス新聞」紙面にはヤーコプ・グリムの燃えるような激越な反論が掲載されている。ヤーコプのこの抗議文は、シュレスヴィッヒ・ホルシュタイン問題に対する彼の立場、見解を余すところなく明確に表明している。

1846年８月25日、ベルリン大学教授６人の連名で、国王フリードリッヒ・ヴィルヘルム４世（Friedrich Wilhelm Ⅳ.）に送付された「シュレスヴィッヒ・ホルシュタインに対する国王への上奏文」は、実は、ヤーコプ・グリムによって起草された上申文であった。しかし、連署した他の教授たちの申し出によって体裁が整えられ、和らいだ落ち着いた表現となったのである。また、第11回ドイツ文献学会でもヤーコプは、シュレスヴィッヒ・ホルシュタイン問題で熱のこもった講演をおこなっている。そうした彼の経歴から、ヤーコプが、この問題にかんして終始一貫、並々ならぬ確固たる信念で臨んでいたことが了解できるだろう。

シュレスヴィッヒ・ホルシュタイン問題に対する国王への上奏文
1846年

この上なく恵み深い国王陛下！

ホルシュタインに住む人々やシュレスヴィッヒに住む人々が、この間に陥った窮乏や苦境については、あまねく人々の胸に深く突き刺さるものがあり、いたるところで怒りの声が沸き起こっております。彼らはデーン人によって、憲法上の諸権利を蹂躙され、傷つけられております。ホルシュタイン人やシュレスヴィッヒ人は、歴史上一度たりともデンマーク人の支配下におかれたことはなく、ただ、デンマーク人と姉妹的な絆を結んだだけであります。そして、デンマーク国は、ドイツの国土の一部である領域に対して、ついには傍若無人にもそこを支配しようと触手を延ばし、もっとも古く、またもっともドイツ的な都市のひとつであるリューベック（Lübeck）との繋がりを断ち切ろうとしております。

私たちが、過去百年間に起こったことを、今日もなお経験しているとするなら、歴史は、抵抗する準備の整った兄弟たちに、毅然とした気持ち、熱烈な自由を求める愛を与えて、彼らを助けること以上に自然で当然のことはない、と語るでありましょう。さもなくば、私たちは彼らを見捨てたのだ、と語られて当然であるからであります。

今や、将来への明るい見通しがあります。と申しますのも、ドイツ固有の領土を他国に縛り付けていた不都合な枷が、デンマークにおける現在の男系相続が解消されるらしいこの機に解き放たれ、もはやこれ以上、私たちの仲間の言語、習俗、権利が侵害される危険にさらされることはないであろうと推察されるからであります。しかし、デンマーク政府は、自国の領土にする目標を保持し、公国をますます自国の支配下に置くために、術計を案じることも圧政をしくことも止めようとはしないのであります。

ドイツ語を話すすべての人々がドイツ民族に属し、困窮のもとにあっては強力な援助を彼らが当てにしてしかるべきであるということ。そうしたことが破ることの出来ない法規（Gesetz）として承認されんことを願うばかりであります。

この海に突き出た地域は、太古の時代に、キンベル族（Cimbern）やチュートン族（Teutonen）が生まれたと考えられる源であり、その後、ザクセン人（Sachsen）が出てきたところであります。私たちの将来の政治にかかわるすべての事柄にとって、その地域の安全を確保し維持していくことは、予測のつかないほどの価値を持つように思われます。ザクセン族は、歴史上輝かしい刻印を残す高貴なディトマルシェン（Dithmarschen. ホルシュタインの西海岸地方。現在、ドイツのシュレスヴィッヒ・ホルシュタイン州ディトマルシェン郡。中世にはこの地域は独立した農民共和国であった。グリム童話集にも「ディトマルシェンのほらばなし」<KHM 159>が出てくる。－訳注）の地域の意味を理解しあっていたはずです。そうした優れたザクセン人のほかに、この地域には、デンマーク人と同様にそう多くはありませんでしたが、フリース人（Friesen）も住んでいたのであります。

連邦議会には、その発端から、国民を安心させ元気づけることが求められており、もしそういう状況にないならば、この問題とじっくり取り組むための賜物（Gabe）が与えられております。今回、連邦議会は、彼らに対し、祖国の誇りと名誉にかけ

て対抗措置をとるでしょうか。

なにしろ今回の件は、外国に対する解放戦争（Freiheitskrieg.ドイツの対ナポレオン解放戦争 1813-15年 のこと。－訳注）以来の大事件であります。あの戦争は、それ以前に幾度も引き裂かれながらも、しかし、言語や文学を通じて共にあり続ける私たちのドイツ国に自らを思い起こさせた戦いでした。

私たちは、ホルシュタイン人に対して、ドイツの隅々から響き渡った彼らへの励ましの声を聴き、ここベルリンからも声を大にして励ましの言葉を送るつもりであります。そして、私たちの純粋な感情が誤解され、あるいは曲解されるやも知れないという恐怖の念は、今、ここできっぱりと払いのけられねばなりません。

目下、通常ではない行動が必要である事態に直面しているがゆえに、こうして上奏文をしたためております。と申しますのも、こうした非常事態下では、私たちに襲い掛かる苦悩を、あらいざらい直接に陛下の前にさらけだすこと、陛下に備わる正義と権勢に期待を寄せること、そうした方法をとることが簡明であり、また国王陛下に対して、律儀であるようにも思われたからであります。この問題は、通常、私たちが行動するさいの政治的党派の活動の一環として判断されるべき性質のものでは決してありません。愛する祖国に対し、偏ることのない開かれた目で向き合うならば、この問題は、たとえこれまでの主義主張が異なっていようが同じ目線で判断されるべきものであります。これまでドイツ人の志操は、ややもすれば、純然たる理論の渦のなかへねじ込まれていき、ここかしこへと揺れ動いていたのでありますが、今度の件は、そうした志操が、或る偉大な目標に向かいそれを誠実に追求するなかで一つになり強固になるという、ドイツ人にとってほとんど初めての出来事なのであります。

国王陛下に対し、私たちが固く信頼している陛下のその英知でもって決断をしてほしいと迫ることは、愚かで尊大かつ不当な行為である、と思うわけにはまいりません。また、これまで述べたことを懇請することは、禁止されてもいなければ、不法でもありません。長く続く日照りの後、人間は神に雨乞いをしますが、雨乞いがなかろうとも、天は地上に雨を降り注いでくれます。天が為す全てのことにおいて、神は疑問をもちません。神ならぬ国王陛下にあっては、人間特有の流儀、心情でもって、現在、すべてのドイツ人にとってもっとも熱烈に望むことは何か、もっとも生

き生きとした感情は何かについて、あれこれと考え悩み、疑問をもたれていることでありましょう。それが上奏文を認めた理由であります。

永遠に変わらぬ忠誠と最深の畏敬の念のもとに
我らが王国の国王陛下
恭順を誓う

エンケ（Encke）、ヤーコプ・グリム（Jak. Grimm）、ラッハマン（Lachmann）、ペルツ（Pertz）、ランケ（L. Ranke）、トレンデレンブルク（Trendelenburg）

1846年８月25日、ベルリン

シュレスヴィッヒ
『フォス新聞』91号、1848年４月17日

本紙の前号90号に「海に抱かれたシュレスヴィッヒ・ホルシュタインは何処にあるのか」という表題で、署名者Hと記された論説が掲載された。その論説を私は、心の底から湧き上がる怒りでもって読んだ。或るドイツ人が、実際にそれを書いたとするならば、その人物は、顔面からつま先にいたるまで、真っ赤な色に染まる運命にあるだろう。一体、流されたドイツ人の血が復讐を叫ぶ土地で、すぐさまそうした言葉が、どうして発せられうるのだろうか。或るベルリン人の筆によるその見出しからしてすでに、野卑なあざけりの意図が露わになっている。仮面をかぶった或るデーン人（Däne）という外観をもつこの執筆者は、1839年にフレンスブルク（Flensburg）で出版されたウィンプフェン（Wimpfen）の『シュレスヴィッヒ公国の歴史と現状』というまったく凡俗な著書を引用している。おそらく彼は、ファルク（Falck）、ヴァイツ（Waitz）、ドロイセン（Droysen）、ミケルゼン（Michelsen）などが公にした徹底的な論究について、そこから何一つ学んでいない。あるいは、もし彼がそうした著書を知っているとするならば、彼はそうした本質的な論述の成果を意図的に隠しているのである。

そうではない。シュレスヴィッヒは根源的にはデーン人の国土であり、そこでは

ドイツ人は他所から来た客なのであって、分け与えられたその土地に面目もなく住みついた―などという話は、まったくの間違いである。そうではなくて、シュレスヴィッヒは根源的にドイツ人の国土であって、その土地に、逆にデーン人が攻め込んできたのである。

キンブリ族が住んでいた半島（cimbrische Halbinsel. ユトラント半島のことか。－訳注）はすべて、かつてゲルマン人が住んでいたのであって、決してスカンジナビア人が住んでいたのではなかった。ジュート人（Jüte. ユトラント人）さえも、私がかつてドイツ語の歴史で証明したように、彼らは非スカンジナビア系なのである。ゲルマン人は、みずからの土地に他の民族が移住してくるのを許容してきたといったことは、まったく考えられない。ブリタニアへ渡ったザクセン人、アングル人それとジュート人、それぞれのベダ（Beda）、つまり、この移動の最古の保証人、総じてゲルマン人と呼ばれる彼らが、ひとつの民族ではなかった、ということは信じられない。デーン人に関する件で聞く耳をもたずに自己主張するひとは、デーン人の領域がアイダー川まで延びたアダム・フォン・ブレーメン（Adam von Bremen. 1040-1081頃。北ゲルマンのタキトゥスとも称される東フランクの歴史家。－訳注）に至る以前の時代まで遡って深く知ろうとはしない。しかし、今日にいたるもなおジュート語のなかに、決してデーン語ではなく、ドイツ語との真に内面的な関係を示す構成要素がみられるのである。ジュート人が徐々にデーン語に順応していったとしても、彼らの血肉がデーン人風にさせられているとしても、シュレスヴィッヒの人々はそれを望んでいるわけではない。彼らは、過去にも進んでそうしたわけではなく、将来もそうしないだろう。彼らは、ホルシュタインやドイツ国と聖なる契約や習俗によって固く結びついているという感情を抱いている。

ドイツ人は、いつまでみずからを辱め、他国の者の肌をなでて可愛がるつもりなのだろうか。ドイツ人は、ホルシュタインやシュレスヴィッヒに住む我々の同胞の郷愁の念、切望する声に耳を傾ける意思はないのだろうか。ドイツ連邦へシュレスヴィッヒを組み入れることは、すでに、フランクフルト国民議会で厳粛に表明されている。また、プロイセン軍が、すでに、これまでの過ちを償うべく燃えるような思いで、アイダー川の手前の岸辺だけでなく、向こう側にも進軍している。ここ２年の間、ドイツのあらゆる地域で歌われた歌は、虚ろで空しい雰囲気の中で鳴り響

いていたのではない。それは偽りの熱狂などでは決してないのだ。シュレスヴィッヒに寄せる人々の心底からの思い入れが、やっと報われ、それが実るのだ。ドイツの国土は、今や、すべてのデーン人また彼らの側に立つすべての人々に抵抗して、解放の日を迎えるであろう。デンマーク国王が、半ばとぼけたような不自然でわざとらしく口にしたあの、巧妙に入り込んだ約束の地（die schlauen Verheißungen）を、ドイツ人が、掻き乱し裏切るようなことはまったくない。

ベルリン住民への声明

『立憲新聞』254号、1850年８月31日

私たちは、もっとも崇高な案件に対し、近頃いい加減になってきた世間の関心を、もう一度かきたて、共感を深めていくよう努めたい。シュレスヴィッヒ・ホルシュタインに対する救援金は低調になってきており、芳しくない。その一方で、戦争のきびしさは増し、困難な状況は至るところで続き、さらには、深刻の度を増してさえいるのだ。ベルリンのような大都市において、かなりの月日がかかって集められた金額が、総計１万２千ターラーとなった。この金額は、なるほど有難いことではある。しかし、その内実をみれば、多大な成果を上げたということはできない。そのなかには、大都市よりも熱心かつ誠実に事を運んでいる周辺の小さな町々からの救援金も含まれているのである。もっとも多く救援金を払った人々は、中流階級や貧しい階層の人々であり、上流階級や富裕者からの入金はわずかなのである。

富裕者たちは湯治へ出かけたり、あるいはコレラを恐れて都会から逃れているので、そうした結果になったのだ、といわれている。しかし、彼らは、その滞在地に新聞を転送させているだろうし、どのような事態が起こっているのかということを知っているだろう。彼ら富裕者たちは、幾度となく夜会を楽しみ、そのさい、彼らのポケット・マネーを係りの女店員たち（Mamsell Rachel）に手渡すのである。が、その多くのものが、シュレスヴィッヒのためには、ポケットからびた一文も差し出すことはない。しかし、私たちは、誰をも誹謗したりはしない。この問題に関心を示すことなく振る舞っている社会階層の、そのすべての人々を、手綱で引っ張り連れ出すことなど、そもそも出来る話ではない。彼らは、祭司やレビ人のように尊大

な気持ちでその場をやり過ごし、負傷して倒れているひとの傷口に油を注いで介抱しているサマリア人を見て、道の向こう側で肩をすくめている（シュレスヴィッヒ・ホルシュタイン問題に対して無関心な富裕者層は、サマリア人のように道に倒れしひとを介抱することなく、肩をすくめて道向こう側を通り過ぎていく祭司やレビ人のようだ、という意か。「知らんふーなーの暴力」。この「善きサマリア人の譬え」は新約聖書に出てくる。或人エルサレムよりエリコに下るとき、強盗にあひしが、強盗どもその衣を剥ぎ、傷を負はせ、半死半生にして棄て去りぬ。或る祭司たまたま此の途より下り、之を見てかなたを過ぎ往けり。又、レビ人も此處にきたり、之を見て同じく彼方を過ぎ往けり。然るに或るサマリア人、旅して其の許にきたり、之を見て憫み、近寄りて油と葡萄酒とを注ぎ傷を包みて己が畜にのせ、旅舎に連れゆきて介抱し、あくる日デナリ二つを出し、主人に与へて「この人を介抱せよ。費もし増さば我が帰りくる時に償はん」と云へり。「ルカ伝」10章30-35節。－訳注）。３億6500万人の中国人が、ごくわずかの寄金協力によって救われるかもしれないという遠く離れた中国の出来事に、私たちは、この３か月間、夢中になった。あたかも、一滴のしずくから父なるライン川がなりたっている、といったふうに思ったのである。その一方で、鉄道を利用すればたった一日ですぐに助けにいくことのできるような、きわめて近い土地に住んでいる私たちの同胞である50万人のドイツ人、シュレスヴィッヒ・ホルシュタインに住むドイツ人のことは忘れ去られたままになっている。

広く読まれている新聞によれば、ポンメルンの或る聖職者が、この反乱に援助金を出すことを諌めて、思いとどまらせた、という（ちなみに、ヤーコプ・グリムと思想を共にしたドロイゼンの父親も、ポンメルンの従軍僧であった。マイネッケ・矢田俊隆訳『世界市民主義と国民国家Ⅱ―ドイツ国民国家発生の研究―』岩波書店、1972年、35頁参照。－訳注）。残念ながら、委員会に寄せられた幾人かの救援金は、匿名でなされており、また、名前を伏すことをはっきりと要望したうえで、寄付するひともいる。婦人や名前の知られてない一般の人々は、名前が出ることに抵抗があるかもしれない。しかし、世間に名の知られた著名な人々は、是非、次のことを考慮に入れるべきである。もし、彼らが寄付するさい、その名前を表に出さないのであれば、彼らは自らの天賦の価値を摘み取っている。否、おそらく、その与えら

れた才を、少しも発揮してないことになる。というのも、彼らが匿名で寄付すれば、世間に与える彼らの影響力、彼らもまた支援しているのだと範を垂れることによる影響力のすべてが失われるからであり、また、彼らが表に出ることが期待されている場面で、その名前が挙がってこないということは、人々を怖気させるからである。

世間の人々は、なるほど共に毛皮を洗うことを手伝おうとはするが、毛皮が濡れることはするな、という（理不尽な要求をする、との意か。－訳注）。かかる人々は、みずから正しいと思うことを実行する。しかし、それを表には出さない。というのも、そうすれば、ひょっとして悪く受け取られやしないかと思い込んでいるからである。しかし、一体、誰が純粋な意図を、なにか悪意あるものと受け取るだろうか。私たちは単なる私人であって、誰も政治的な権力をもっているわけではない。が、にもかかわらず、人々が健全な目と共感する心でもって、世界で起こっている事態、ひどい嫌悪感に襲われる事態を観察することを、誰も押し止めることはできないだろう。

私たちの政府の純正さを認め、幸いにもそれを引き継いでいるロンドンでの協定（das Londoner Protokoll. ちなみに、「ロンドン議定書」ができあがったのは、第一次シュレスヴィッヒ・ホルシュタイン戦争 1848-1852 の終結後である。その議定書では、従来どおりデンマーク王が同君連合国家としてシュレスヴィッヒ・ホルシュタイン両公国を統治することが決定された。それ以前、1850年８月２日、デンマークによるホルシュタインの領有を認証した協定がロンドンで結ばれた。参加国は、ロシア、フランス、イギリス、オーストリア、プロイセン、スウェーデン。ヤーコプのこの新聞論稿は、まさにこの協定の直後に書かれたものである。－訳注）は、しかし、ドイツの名誉を汚している。さらには、その協定は、イギリスの国土の歴史を少しは知っている数少ないイギリス人自身を困惑させるにちがいない。というのも、この件にかんするイギリスの政策は、私には不可解である。何故、太古の時代に、その後裔が今日のブリタニアのなかで主力を占めているアングル族やザクセン族が生まれ出た土地、遡ってみればイギリス人の兄弟の子孫がなお住み続けている故郷の大地、つまり、大陸の片隅（ユトラント半島のこと。－訳注）に住む人々に援助することを拒むのだろうか。そして、逆に、何故、イングランドを長い間荒廃させたデーン人の子孫に援助を与えようとするのだろうか。私には不可解である。

歴史が私たちをこんなにもひどい誤りから守ることがないとするなら、一体、何のために歴史を学ぶのか。

ベルリンでの教授としてのグリム兄弟

グリム兄弟は、元来、カッセル（Kassel）では図書館員として勤務していた。彼らは、新たに創設されたボン大学に教授として招聘されたときも、それに応じるつもりはなかった。ゲッティンゲン大学からの招きに対し、1830年になって初めて彼らは、天職としての図書館員と同時に教授としての職に就く気になった。ヤーコプは、大学への就任講演を「郷土愛について」（De desiderio patriae）という題で行なった（ここで、ショーフは、Über das Heimweh 郷愁について、と表記しているが、正確には Über die Heimatliebe 郷土愛 であったことにつき、拙著『ヤーコプ・グリム 郷土愛について―埋もれた法の探訪者の生涯―』編集工房 東洋企画、2006年、143頁以下、173頁以下、参照。－訳注）。ヴィルヘルムの就任講演は、「歴史と詩学」（Geschichte und Poesie）と題して行なわれた。

二人の兄弟は、どこに学問的意義を見いだすか、ということにかんしては、その観点を異にしていた。ヤーコプは、弟ヴィルヘルムに比べて、比類ないほど創造的に仕事を推し進める力を多くもっていた。人並み以上の素質や精神力を生まれながらに持ち合わせていたヤーコプは、その天賦の才を学問の世界で、偉大なそして画期的な仕事を成し遂げるゆるぎないエネルギーとしたのであった。持続的に仕事に向かう志操や探究心が彼のなかであまりに強かったので、そうした彼の気性が、一度軌道が敷かれると目標に到達するまでその道を休むことなく、彼を前へ前へと駆り立てていった。弟ヴィルヘルムも、研究対象の幅の広さや新たな精神世界を切り開くための独創的な才という点では、兄ヤーコプと同じくらいそれを持ち合わせていた。が、彼は、病気がちで、それゆえ、兄のように精力的に仕事をこなすエネルギーが、彼には欠けていた。ヴィルヘルムは、兄のように研究対象の幅を広げるのではなく、領域を限定して研究をすすめた。また、常にそのことを自覚し、心得てもいた。そのため、彼の研究姿勢は、目的意識がはっきりとしており、彼が設定した研究対象に対して、そこからどんな逸脱をも許すことなく突き進むという点で、

際立っていた。ヴィルヘルムとは対照的に兄ヤーコプは、学問世界のヘラクレイトス（Heraklit）のようだと呼ばれていた。また、そう呼ばれるのもごく当然のことであった。兄は、発見するよろこびを求めて、言語や法、そして詩を、世界のあらゆる民族にまたがって包含しようと試みていたのである。他方、弟ヴィルヘルムのほうは、彼の研究領域、とりわけ、ヴィルヘルムが好む領域、つまりドイツの英雄伝説（―ドイツに限らず、彼は、せめて北欧まで伝説の対象を広げようと試みていたのではあるが―）という、彼みずからによって設定した枠の中で、緻密に研究を重ねていった。伝説や童話とならんで、ヴィルヘルムが好んだ領域は中高ドイツ語文学の原典批判、後には、語彙研究であり、彼は、それに没頭した。

とはいっても、ヴィルヘルムも正会員に指名された後、彼ら兄弟は、自分たちの主要な仕事は科学アカデミーの会員として活動することである、と心得ていた。兄弟が、アカデミーの会議を欠席することは、ほとんど稀であった。ヴィルヘルム・グリムは、アカデミーでの講演を、1842年から59年にかけて、17回行なった。

ヴィルヘルムは、それらの講演の個々の別刷り、分冊版を安い値段で手にしてもらうため、グリム発行所という形態で（bei dem Grimmverlag）、ベルリンのダムラー社から公刊させた。そのようにして、1855年、小論文「職匠歌の動物寓話」（Tierfabeln bei den Meistersängern）が12シルバーグロシェンで販売された。続いて、1857年には、論文「一眼の巨人ポリュペモスの伝説」（Die Sage vom Polyphem）が、また、彼が亡くなった年の1859年には、「ローゼンガルテンの新しく見つかった詩の断片」（Bruchstücke aus einem unbekannten Gedicht vom Rosengarten）が出版された。

ヤーコプ・グリムもまた、アカデミーでかなりの回数、講演を行なっている。そして、活字になった論文を送付することに喜びを感じていた。

そして、そうした論文を纏めて、ダムラー社から出版するつもりであった。しかし、ヤーコプは、その計画をいつも先延ばしにした。というのも、出版する前に、そうした論文にさらに手を加え、完成度の高いものにしようと思っていたからである。結局、ヤーコプの講演録、論文集は、彼の生前に日の目を見ることはなかった。

ヤーコプ・グリムは、アカデミーで以下のような講演を行なった。1844年には、「ヤーコプのイタリアとスカンジナビア旅行について」（Über seine italienischen und skandinavischen Reisen）。1847年、「ドイツ語におけるペダンティックなものについ

て」（Über das Pedantische in der deutschen Sprache）。1849年、「火葬について」（Über das Verbrennen der Leichen）。1851年、「言語の起源について」（Über den Ursprung der Sprache）等々。

ヤーコプは年をとればとる程、彼の諸々の講演に、或る種ますます深遠な意味を帯びた考察を付け加えていった。その考察は、もともとの彼の専門分野から離れて、不朽の美しさを備えており、今日なお、そうした講演録は、好んで読まれている。彼の講演「老年について」（Über das Alter）も、そうした意味で、今日までよく読まれる作品のひとつである。老人は、確かに処世の知を積んでいる。そのことをヤーコプは認めるが、しかし、彼は、そのことを高く評価して、老人を称賛しているわけではない。その講演でヤーコプが述べたことが、彼自身の人生経験とは異なっていたとしても―（ヤーコプ自身は、年を重ねても処世術を積むことはなかった、という意か。－訳注）。ヤーコプは、死を迎える少し前に、この「老年について」の論稿に手を加えることを真剣に考えていた。というのも、彼のもとに、「寿命について」（Sur la longévité）という表題の花形装飾の贈呈本が送られてきた。そのなかで、通常、人間は百歳まで生きることができる、ということが立証されていた。彼は、冗談めかしながら、自分もその年まで生きるつもりだということを、家族に宣言していた。

そのようにヤーコプが語ったということは、人生を肯定する彼の強固な意志、彼の不屈な創作力を示している。倦まず弛まず仕事に熱中し、遠大な構想のなかにあって、いくらか気を休め、のんびりした時間をもったならば、彼は、確かに、もう少し長く生きることもできたであろう。彼は、仕事が佳境に入ると、中断することなく深夜まで没頭し、その結果、家族のものが策をめぐらして、彼を仕事机から離れさせようと四苦八苦したのであった。彼は、一日中雨が降る日は、いつもうれしがっていた。というのも、その日は、散歩に出かける必要がないからである。まさしく彼は、休息をとりたい、静養したいという欲求を知らなかった。彼は、みずからの気力を回復する源を、ずっと継続している辞書編纂の仕事や他の仕事のなかに見出していた。彼は、その上さらに実行したいと思っていた様々な計画を心に描いていた。が、もはや、それが実現することはなかった。

1859年11月、ベルリンの科学アカデミーがシラーの生誕百年を記念する講演を催

すことになった。講師の人選のさい、もっともよくドイツ民族の魂に精通している適任者としてヤーコプ・グリムが選ばれた。彼の講演は、大きな反響をもたらした。その講演は、これまでシラーについて幾人もの人々が語ってきたなかで、もっとも美しいものであり、当時行われた多くの講演のなかで、唯一今日まで読み継がれているものである。ヤーコプは、シラーを祝うこの記念日の意義に触れながら、ドイツ諸部族の統一という彼のお気に入りの理念（Lieblingsidee）をほのめかし、こう語った。「鐘が、雷鳴を裂き、長い悪天候を吹き飛ばす。今後もさらに、荘厳な祭りの場で、私たちが必要とし、待ち望んでいる民族の統一に逆らうものすべてに対し、鐘が鳴り続けるかもしれない」。

このシラーを偲ぶ講演があらゆるサークルに与えた印象について、ドイツ語辞典の編集作業の研究仲間であるカール・ヴァイガント教授（Karl Weigand）が、ギーセン（Gießen）からヤーコプに宛てた1860年１月21日付の手紙の中で、こう記している。

「貴殿のシラー記念講演は、当地でも最大級の喝采を博しております。私が頂いた講演速記録（Exemplar）は、手から手へと次々と回読されております。貴殿は、深淵かつ的確に心底から語ってくれました。それはまさしく民衆の声でした。だからこそ、貴殿の発した言葉は、厳かなうちにも感動的に、ふたたび、ひとの胸に染み入ったのであります。私は、この講演を（活字からではなく、会場に参加して、－訳者補足）貴殿の口から聴くことができたらどんなに良かったことかと、何度も思ったものでした」。

その講演が活字化され、その冊子を受け取ったときも、1860年２月21日付で、ヴァイガント教授は手紙を送っている。

「貴殿のシラー記念講演の新たに送られてきた冊子は、それに寄せる大きな喝采によって、他の人々が行なった記念講演のなかで、もっとも歓迎されるものであることを示しております。そして、胸中深いところから出てきた貴殿の言葉が正鵠を射たものであると、ひとは至るところで感じ、認識しております」。

ヤーコプと同郷の婦人にルイーゼ・ギース（Luise Gies）というハーナウ（Hanau. ヤーコプは、1785年、ハーナウで生まれ、グリム一家がシュタイナウへ引っ越す1791年まで、そこで暮らしていた。－訳注）の郡医官の娘がいるが、彼女にも、ヤー

コプは講演の冊子を送っていた。ヴァイガントと同様に、ギースもその講演に感激し、1859年12月29日、ヤーコプに手紙を書いた。

「あなたは、シラーの記念日に、まさに偉人に相応しいなんて素晴らしい講演をなさったことでしょう。私は、シラーのもっとも深い本質、彼の特性を見抜くことはありませんでした。シラーを、彼の偉大な親友であるゲーテと対比させたとき、シラーの特異な偉大さが明らかにされます。あなたの講演は、彼に関しあらゆる点から解明されていて、彼をあらためて認識することができました。あらゆる言葉のなかから或るひとつの言葉が私たちの意を汲むものとなる過程が生き生きと描写され、また、ふたつとも相応しい場合には、疑いためらうことになります。

これまで書き記したことが適切であり、多言を弄してしまったというのでなければよいのですが・・・。あなたの講演によってはっきりしてきたこと、予感された多くのことがいかにして明瞭になり、また、うれしいことに、いかにして多くの疑念が湧いてきたかということを、私は、あなたに申し上げたいと思いました」。

ヤーコプ・グリム以上に、ドイツ語について事実に即した適切な判断を下すことに天性の能力をもったひとはいない。というのも、彼以上に、ドイツ語の本質へと深く沈潜し究めていったひとはいないし、また、ドイツの言葉をそれほど多く、じっくりと調べたひとはいないからである。さらには、彼以上に、研ぎ澄まされた鋭い勘と天才的な理解力でもって、価値のあるものとないものとを区別したひとはいない。

そういうわけだから、彼は、正しい語法に秀で、鋭敏な感覚を持っていた。彼は、言語が不正確に用いられると、当然のことながら、しばしばひどく怒りを表わすことがあった。

或る匿名の「言語の達人」（ein ungenannter Sprachkenner）が、1847年10月21日に科学アカデミーでヤーコプが行なった講演「ドイツ語におけるペダンティックなものについて」をベルリン新聞に掲載した。が、その記事が、講演の要旨をドイツ語の欠陥を難じるものと捉えたことに対し、ヤーコプはものすごく腹を立てた。というのも、ヤーコプは、その講演の結びで、アカデミーのメンバーたちに、「ドイツ語を監視することについて」推奨していたからである。公刊された冊子では、次のような細やかな説明がなされている。

「言語を監視するとは、言語のかたわらで見守る（bei der Sprache wachen）ということを意味する。(abstinere a dormiendo)。たとえば、見守っていた星座が光り輝くように。または次のように言い換えた方がいいのかもしれない。対象に気を配ること。つまり、言語を注意深く見守り、保護すること」。